
BADな誕生日

雪之丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A Dな誕生日

【Nコード】

N 5 7 8 8 B

【作者名】

雪之丞

【あらすじ】

…変だ…絶対におかしい…今日は俺の26才の誕生日。そりゃあ、派手にパァッとお祝いをしたいさ…けどね…こいつは違う…何故、恐面の黒い服の方々に囲まれてる?! ああ…なんでこんなことに…

第1話 悪夢の誕生会（前書き）

初の投稿になります。よろしくお願いします。

第1話 悪夢の誕生日

…変だ…

…絶対におかしい…

今、俺の前には中華料理がオンパレードで並んでいる

そして周りを見渡せば…

映画のセットみたいな金の龍とかがある…

なんなんだ？これは…

今日は俺の26才の誕生日

そりゃあ、派手にパーツとお祝いをしたいさ…

けどね…

こいつは些か派手過ぎやしないかい？

そもそも俺は、何でこんな高級そうな中華料理屋にいるのでしょうか？

そして…

何故、恐面の…妙な威圧感がある黒い服の方々に囲まれてるんだろ
うか？

派手のベクトル…

希望と違うよ、イエス様！

ああ…なんでこんなことに…

『これ、美味しいよ… たっくん、食べんの？』

俺の隣席で、にこやかな顔で春巻を喰ってるこのアマ…
そうだ…こいつが全ての原因だ…

ヤツの名は新宮沙生…
しんぐう さき

俺が23の時に少しだけ付き合った…
いわば昔の彼女だ

この女のせいで俺は散々な目にあってきたのだ…

うう…思い出ただけで目頭が熱くなる…

ちなみに、黒服の方々はコヤツを>お嬢くと呼びます

はい、バッチリ>極める道くの人ですね

しかも…

こやつ、かなり痛い思考パターンをしてたりする…

顔は一重の目が和的な感じがして…

かなり…というか、直球ど真ん中！

150キロのストライクで好みなのだが…

かなり厳しい頭の中身なのだ。

そう、たとえば…

『 たつくん、春巻食べさせてあげる。あ〜んして、あ〜ん 』

いきなりですかい！？

前振りなしで！？

てか、空気を読めや！

こんな痛々しい空気の中で食べるかい！

『 いらないから。腹、空いてないし 』

周りの目もありますから…やんわり拒否。

まあ、お腹一杯だしね…

この空気で満腹ですよ！

柔らかく言ったつもりなのに…

…ああ…それでも視線が痛かとです…

『 あ、たつくんは最初はスープからだったね はい、じゃフカのス
ープ あ〜ん 』

て、無視ですか！？

うお！スプーンを押しつけてくるな！

『 いや、だから結構ですから 』

再び、柔らかく拒否

く…彼等がいなければ…

強気にいくのに…ガッデム！

『 猫舌だから、熱いの苦手？じゃ沙生がフウフウして冷ましてあげ
る 』

はいはい、きました。

俺の意志は完全無視ですよ。

さつきから…こいつは…

貴様は俺の彼女かぁ！

違うだろ！

おまいさんは（元カノ）だろうが！だろうがよ！

それになぁ…

俺は…自分のことを名前で呼ぶ女はむかつんじゃあ！

可愛いとでも、思つとるんか、このアマ…

ただ単に頭の痛さを披露しとるだけなんじゃあ！

ああ！イライラする！

怒鳴りつけたい！

…でも、そいつぁ無理な話たぜよ…

何故なら…彼等がいるから…

後ろにいる黒い人達からの異様なプレッシャー受けてますから！
ニュータイプでなくても分かります…

それが殺意じゃないことを切望します！

痛い…痛いよ…視線が厳しいよ…！

『たつくん、暑い？汗、凄いや？』

いや、冷や汗ですから。

帰宅させてくれたら治りますから！

『いや、大丈夫だから気にしないで…』
穩便に…可能な限り穩便に済ませたい！

『……………ちよつと……………』

沙生の雰囲気が変わった
威圧感のある低い声になったかと思ったら、後ろに控えていたお兄さんの一人に声をかけて…

…つて、あれあれ…？

さっきまでの甘い声は何処へ！？

何やら小声で耳打ちしてますが…

ん…？

あ…急に涼しくなってきた…

まさか…

沙生の方をみると満面の笑み…

『たつくん、ごめんね… 気の利かないアホばかりで…』
笑顔で恐ろしいこと言うなあ！
俺をそんなに殺したいんですか！？

…あゝあ…黒い人達からのプレッシャー、確実に上がりましたね、はい。

死の宣告を受けたよ、これ。

頭上で死のカウントダウン、表示開始したよ、マジ

…といった感じで…

話は噛み合わないわ…

空気を読まずに、俺の寿命を縮めてくれるわ…

最悪にも程がある。

うう…悪夢だ…これは悪夢だ…
だが、まだ最悪ではないのだ…
災厄…それはこれからくるのだ

『パパ、遅いなあ』

コヤツの言うパパ…

そう、それはこの黒いお兄さん達をまとめていらっしやる方…
首領と書いてドンと読む…

俗に言わなくても組長さんである。

俺はこれからそのお方にコヤツと結婚の話をする為、何故か会うことになっており…って、そもそも、そこがオカシイんだって！

はっ！

こいつはきつと、トワイライトゾーンとやらに迷い込んだに違いない！

もしくは、世にも奇妙な物語だ！

そうじゃなきゃ、この状況は変じゃないか！？

だって、そうだろ！？

何で昔別れた彼女と結婚なんてお話に！？

復縁した記憶ないよ！

再会したのも、つい最近よ！？

しかも、こやつは組を継ぐとしたら…とかの話しちゃってるし！

え！？なに、この展開！？

変だよ！絶対オカシイって！

俺の話を聞いて下さい！

そもそも拒否権ナシ！？

納得なんてしてないよ、絶対！

てか、最初から間違ってますから！

お義父さん、組、継ぎませからね！

て、ちがー！う！

お義父さん、じゃない！

最初から結婚なんてしませんから！

うおおおおおおおおおお！

否定することが多過ぎて、何処から始めたら良いかわからないよー！

神様、いるならHELP ME！

こうして史上最悪な誕生日パーティの幕は上がった…

第2話 災難は忘れた頃に…

遅れましたが自己紹介させて頂きます

俺の名は小野上敬之^{おのうえたかゆき}

26才のフリーターしてます

この話…

事の始まりは、二週間前に遡る…

あれはクリスマスの余韻残る、26日から始まった…

『給料入ったし、たまには良いもの喰わないとね』

そう、あの日の俺は浮かれていた

給料日で金が入ったからというのもあったし、久しぶりに携帯を復活させたというのもあったからだ

ちなみに携帯は料金未払いで止まってました

そんなこんなのバイトの休憩中、ちよいと浮かれ気分ですりなんか食べていた。

そう…あの時までは至福の時間だった…

寿司を手に取り、いざイクラを口へ…

すると、いきなり振動をして着信を告げるMY携帯。

サブディスプレイに名前は表示されていない。

…誰だ？

以前の携帯番号は解約しており、今回新規で再契約しなおした。
だから、今の番号とアドレスは新しいものだ

しかも、変えてからは本当に親しい数人の友人と、家族くらいにしか教えてはいない

そして、こんな時間に連絡してくるヤツなんてほとんどいないはずだ

…ん…

まあ…今は食を優先で♪

誰からか、とかの確認は後回し…っと。

……………食事終了……………

『ふう…さてと、あの着信は誰かな…っと』

ん？メール？

はて、見覚えのないアドレスじゃが…

無題…だな…

どこぞの迷惑メールか？

今時珍しい…

どれどれ、開封っと…

「お久しぶり たっくん、元気にしてる〜？私が誰か当然わかるよね？もし分からないなら許さないぞ〜」

.....思考フリーズ.....

ああ...、目眩が...

まさか...まさか、信じたくはないが...
いや、しかし、あの問題は解決したはず...
だが、この痛々しい文面は...

...くっ！確認を、確認をせねばならぬか...

願わくば...俺の間違いであってくれ！

「もしかして、沙生？」

.....お願い！違ってて！

ベートーベンのピアノソナタ、月光が鳴り響く
俺のメール着信音だ

パニくってマナーモードを解除していたらしい

「さっすが、たっくん！私ってすぐに分かるんだね！うれしいな
」

.....

オーマイガッ！

...神も仏もこの世にはいないのね...

解って俺は嬉しくないです...

ん？否、ちよいと待て.....

...そうだ...

俺は一つの疑問点を沙生にメールする

「あのさ…一つ聞きたいんだけど…いいかな？」
送ると2分もしないでメールは返ってきた。

「な〜に〜？何でも答えちゃうよ〜」
相変わらず早い…

まあ…人間、何か一つは特技があるっていうしな

にしても…ム力つく文だな…

メールがム力つく、って凄い才能だな
中々いないよ、マジで。

いや、今はそんなことはどうでもいい！
聞くことを聞かねば！

「どうやって俺のアドレス知ったの？」
簡潔に解りやすい内容にしたつもりだった

てか、この問いに対する答えって一つじゃねえ？

だが予想に反し、返事はかなりの変化球で返ってくることとなる

「ん〜…教えてあげても良いけど〜…久しぶりに声が聞きたいなあ
〜電話していい〜？」

…ん？意味がワカラナイ
何で電話？

というか……………

疑問点はすぐに聞かないとね！

アハハ… ああ… 頭痛え…

「でも、俺の番号分らないでしょ？」

「知ってるよ〜 090の〜 ● ○ ▲ 〜 □ ■ でしょ〜？」

え…？ なんて知ってるの！？

イミガワカリマセン！

固まる俺、無情にも鳴る携帯

「じゃ〜かけるね〜」

おい！俺の意志は！？

そして、電話着信音に設定したワルキューレの騎行が響き渡る

逃げられない…

下手なホラーより怖いぞ、これは…

…出るしか… 出るしかないのか！？

思考時間2秒弱

…よし… 覚悟は決まった…

『はい… もしもし…』

ああ… この三年で彼女が成長したことを期待しよう…

『あ〜ん たつくんの声だあ〜！ 沙生ね、凄い嬉しいよう〜』

… 変わってない… 全く…

… その能天気な声に、俺の僅かな希望は簡単に打ち碎かれた

…

……神よ……あなたはどこまで無慈悲なのですか……

こうして悪夢の門は開かれたいった……

第3話 展開は唐突に…

『あゝん たつくんの声だあゝ！沙生ね、凄い嬉しいよう〜』
電話からの聞こえる声は、3年前と変わらず甘ったるかった。

『……………久しぶり、だね…』
必死に絞りだした言葉だった。
まあ…頭の中が真っ白になって、それしか言葉が出なかったんだよね…

『あのねあのね』たつくに相談があるのぉ〜』
いきなりな展開だな…
彼女はいつも唐突だ

悲しいかな…人間は慣れるものなんだね…
どんなことでも…
慣れたくはないんだが…

『……………なに？』
さつきから単語でしか会話が出来ませぬ…

『たつくんさ、今、彼女いないよね？』
…え？相談は！？
話の始まりが突飛なのも変わらずですか…

『相談は…？』
一つだけ言わしてください！
言葉のボキャブラリーが乏しいわけではありません

あまりの展開の唐突さに、脳の回転が追いついてないだけなんです！

『あ、そうだったあゝんゝ…電話だといいいにくいなあ…会ってなら話してあげる　いつ暇あゝ？』
厳しい展開になってきました…

>会ってなら話してあげるくって…

そこまでして聞きたいなんて言いました！？俺！？

できるなら、もう関わりたくないんです！

だが、そんな俺の思いはお構いなしに彼女は続ける

『仕事は夕方からだよね？お昼は時間できるよね？ね？』
畳み掛けるように同意を求めてくる

『まあ…時間はあるけど…大抵寝てるし…』

はつきり断れなかった

甘いのだと自分でも思う

てか、女に弱いのかもな、俺は

はつきりしなかったのは…

>相談く…って言った沙生の声に、陰があったからかもしれない

『…仕事の前に一時間でも良いから時間とれないかな…？』
急に声のトーンが落ちた

これが彼女の素だと…俺は知っている

そして、それは俺の前でしか見せなかったことも…

『ああ…わかったよ…なんとかかしてみる』

贖罪のつもりだったのかもしれない

彼女の全てを受け入れられず、逃げ出してしまったことへの…

『わーい ありがとう』 また、いつもの能天気な声に戻り、会う日程を彼女は決め始めた

俺は、ああ…とか、うう…とか、答えながらうわの空でそれを聞いていた

昔、ある女性に言われた言葉を思い出していた…

あなたは優しい…

けど…あなたの優しさは自分のためではない…

あなたは優しさで人を傷つける…

そうなのだと自分でも思う

父親が組長だと知った時…

あの時、俺は彼女から逃げ出した…

正直、受けとめるのは無理だった

自分が消えれば彼女も諦めてくれると思っていた。

でも、失踪した俺を彼女は必死で探した…

見つかりそうになる度、俺も必死で逃げた。

それこそ日本全国…2年間も…

…うう…

だつてさあ！

いきなり>その道くの方々が、自分の周囲をつろつくんですよ！？
そんなん逃げるに決まってるじゃん！

…失礼…

ちよつと思ひ出したら、取り乱してしまいました…

まあ、その時から…俺はずっと彼女を傷つけ続けていたのかもしれない…

ん？…会う…？

たしか別れた後は、出身の秋田に帰ったはずだったのだが…

『…会うつて秋田じゃないの…？』

『今は東京にいるの』

良いことがあれば悪いこともある…

全てにしつかりケリつける良い機会なのだろう…

俺も、彼女も…新たな一步を踏み出さないといけない
そのチャンスなのだ、今は
…そう思うことにした

『じゃ、その日に決まりね 楽しみにしてるゝまたね』
俺の返事を待たずに彼女は電話を切っていた

…良かったんだよな？
これで…

シリアスに決めてみたものの…

若干の…否、かなりの不安が残る…

結局は自分がどっちつかずの…半端者なのだと、改めて実感する結果になるのかもしれない…

こうして、俺は自ら悪夢に踏み入っていた…

第4話 前方の虎 後方の狼 我に退路ナシ

今の俺が置かれた状況を説明することは…

正直、自分でも難しい

豪華な装飾のある中華料理店…

隣には昔の彼女…

後ろにはヤの付く仕事をしている恐い黒服達…

そして目の前には一つの空席…

そこが空席であることによって、今の俺は大きく救われているのだが…

今の願いは…

可能な限り、そこが空いていること…
だがしかし…横目で隣を確認すれば…

『パパ遅いなあ…ちょっと連絡してみるね』

とか言いながら、携帯だしてる人いるし！

あなたは鬼ですか！？

私の希望を摘み取って楽しんでません！？

ああ…お願い…おうちに帰して…

『電波悪いなあ。ちょっと外でるね』

『ああ…うん…』

急ぎ足で部屋から出ていく沙生

そして残される俺たち

……
…ん！？俺たち！？

……
ちよつと待つて！

いやゝ！置いてかないで！

あなたと一緒に嫌だけど、一人はもつとイヤなのよ！
一人じゃないけど、一人と同じだから！

こんな所にこの状況は辛すぎる！

……

気まずい…

なに、この沈黙は！？

うう……どうしたら良いのだ…

『………一つ、聞いていいか………？』

黒い人達の中でも、やたらと威圧感のあられる方が不意に口を開いた。

『な、な、な、なんでございまし？』

いきなり話し掛られたこともあり、声は裏返り、日本語も不自然になっっていた。

だが、相手はそんなことは気にしてない様子だった。

…にしても…迫力ある人だな…

渋みのある低いハスキー声…

一見、眼鏡の似合うナイスミドル

だが、顔をよく見ると細かい傷が無数にあつたりする…

それはこの人が自分とは違う世界に生きているのだと教えてくれる

『若頭！話すなって、お嬢が…』

体格の良い若い人が、ナイスミドルに慌てて声を掛けてきた

……若頭？…若頭っていうと…

『黙ってる…俺が手前勝手するだけだ…』

押し殺した声で付き人を制したナイスミドル

こえゝって！

声だけなのに、凄い恐怖心が湧くんですけど！

『俺はこの組で筆頭若頭してる、奥島龍哉おくしまたつやって者だ』

俺の内なる疑問に答えてくれた奥島さん

けれど…筆頭若頭って…何？

若頭にそんなに種類あるんだ…

筆頭ってことは、この人ナンバー2なんだ…

一つ、勉強になったね！

ああ…こんな恐い方に何を聞かれるんだろ…

『…あんた…このままお嬢と一緒になるつもりなのか？』

おっふう！

いきなり、この質問！

よし、用意した答えを…

『あ…えつとそれは…』

ぬうおおお！

だめだあ！

射抜くような視線のせいで、ワタシ頭真っ白アルヨ！

『なるほど…あんたの気持ちはよくわかったよ…』

『はい？』

…まだ何も答えてないですよ？

一体、どこから理解しました！？

『…断るつもり…なんだろう？』

イエス！正解！

そうなんだけど…

なるべくオブラートに包んだ言い方をせねば…

『は…いえ、あの、それは…』

口が巧く動かないよ！

動け！動け、口！

…無理だね…あきらめましょ…

『…ふっ…目を見りゃわかるよ』

グッジョブ！

さすがです、若頭！

俺の口からは言えませんか…

汲み取っていただき感謝！

『は、はあ…』

でも、今は言葉を濁しときましょ

『俺らはあんたを好きじゃないのは分かるよな？』

ぐお！爆弾発言！

いきなり宣戦布告ですか！？

そりゃあ…好かれてないこと位、薄々わかってましたよ…

『ええ…』

…しくしく…

…さつきからこんな言葉しか使ってないな…

『理由は幾つかある…まず一つ…あんたからはカタギの匂いがしねえ』

え…と…そいつはどんな意味ですか？

『といって、こっち側ってわけでもねえ』

じゃ、なんなんでしょ？

教えてプリーズ！

『そう…あんたからは異質な感じがする』
余計に分からなくなったよ！
異質ってどういうことですか！？

『俺も何回か拝んだことがあるが、中身がないんだよな、あんたさ』
人としてダメじゃん！

『生きながら死んでるんだよ、あんたは』
俺はゾンビですか！？

『しかもだ、あんたは自分で自分を殺し続けてる』
なんか人としてダメじゃない、俺…

『だから、俺らはあんたを好きになれない』
俺も自分は嫌いです

『だが、あんたを買ってもいるんだぜ？』

『え！？』

それは…どう解釈したら良いんでしょう？

わからない、わからないよお！

『今時、日本全国逃げ回ったヤツなんて中々いないしな』
口端を少しだけ上げ、若頭は笑った

『あ、いやあ』

そう言われると何だか照れますなあゝ

『誉めてねえよ』

若頭は一瞬で無表情に戻る

『…はい』

恐いから！恐すぎですから！

『だが、お嬢はそんなあんたが好きなんだろう…だから、お嬢を悲しませることはするな…泣かせたら…俺があんたを殺す…』
死刑判決でしたな、これ…

だって断るから！

彼女悲しみますから！

『まあ、もし継ぐってんなら、俺があんたを立派なオトコにしてやるよ』

『は、は、はあ』

遠慮します

立派じゃなくても良いです

小さな幸せに喜びを感じる人生

そんな平凡希望ですから！

『この男じゃねえぞ？こっちの漢だからな』
空に指で書いて教えていただきましたけど…
なんだかんだで俺、気に入られてます？
…そんなわけないか…

『まあ、がんばれや』

そういつて俺の肩を叩くと、若頭はもとの壁ぎわにもどっていった
再びの静寂

だが、すぐに運命の扉は開かれることになる

『おまたせ〜 下で丁度会ったから一緒にきたよ〜』 ……！』
帰ってきた沙生の後ろには…

『…待たせたな…』
白髪混じりの髪をオールバックに決め、ダークグレーのスーツを
ピシッと着こなす方が…

このお方、誰よりも威圧感があるんですが…
まさか…この中年男性が…
『沙生の父、敏治^{としはる}だ、よろしくな…』

奇跡は起きなかったんだね…

運命は残酷にして無常…

俺の救いの道は閉ざされたのだ…

第5話 覚悟してススめ

さあゝて…ここからが正念場だな…
今こそ覚悟を決めるとき、だな…

今、目の前にいる方をいかにして説き伏せるか…
その一点のみに全て掛かっている

『遅れてすまん…。東京の道は混雑していかんな』
そう言いながら、組長さんは自分のコートを、黒服の中でも若いであろう人に手渡した

『なんだ…まだ食べてなかったのか？』
そう言いながらテーブルを見渡すと、組長さんは席に付いた。

『たつくんはねゝ。パパが来るまで食べるの待ってたんだよゝ』
ええええええええええ！
なんでそんなお話に！？
違うよ！違いますからね！
勝手に俺のイメージ良くしないで！
今は悪い方が嬉しい時なんだから！

『ほうゝそいつは悪いことしたな…それじゃあ、もう遠慮しないで構わんぞ？』

食うしか…これでは喰うしかないではないですか！？
お腹空いてないのに…

『…い、いただきます…』

沙生が隣で不敵な笑みをしている…
は、ハメられた…

しくしく…

もうこんなのは嫌あゝ！

仕方ないので、無理矢理料理を胃にねじ込んでいく

…この料理、本当は美味しいんだろな…

旨い物が不味く感じるなんて…新手の拷問ですか！？

『たつくんたらゝそんなにお腹空いてたのゝ？』

空いてねえよ！

『汗、凄いけどゝまだ暑いん？』

苦痛に耐えながら食べてますからね！

あなたのお陰でね！

『…楽しそうなところ悪いが…俺に何か話があるんじゃないのか？』

そう言った瞬間の目が鋭く光った気がした

ちなみに…ちっとも楽しくないですからね！

『あゝ！そうだったあゝ！あのね、前から結婚したい人がいるって話してたでしょゝ この人がそうなのゝ』

いきなり本題突入！？

早くない！？

しかもストレートな言い方は危険じゃない！？俺が！
何か…こう…柔らかな言い回しをしましうよ！？

『…ふむ…そうか…君があ…』

じっくりと俺を観察する組長。

何が（そうか）なんでしよう？

居心地が究極に悪いんですが…

『君に少し聞きたいんだが…』

『な、なんでひょ？』

裏返る声

『そんなに緊張するな』

しますがな！無理なお話ですから！

『君はあの時の逃亡者…だよな？』

『ええ…』

余計なことを言わないようにしないと…

『その君が何故、沙生と結婚なんて話になっっているだい？』
こちらが聞きたいです！

『…まあ…またこの娘が勝手を言っているんだろう…』
およ？意外な展開！

『あの時の相手との結婚なんて、許すつもりはなかったが…』
そのまますんなり話がいつてくれれば…

『君にあつて気が変わった』
はい？

『俺も君が気に入ったよ』 なんてそうなる！？

『まあ…どうするか、後は君次第だな…どうしたい？』
全ては悪い方向に流れていく…

よし…… こうなれば奥の手だ

『…自分には勿体ない程の良い女性ですし、とても良い話だと思います。 けど…』

一気に後はいくのみ…！

『自分には人として重大な欠陥があります。 だから申し訳ありませんが、結婚なんてできません』

『欠陥？』

よし！ 食い付いた！

『はい、自分は死に憧れているんです。 自殺願望者に近いと思います。』

こんな奴と結婚させようなんて親はいないでしょ…

『…なるほどな…』

組長は目を閉じて何か考え込んでいるようだ
ほらね、こうなるんだから。

『ですから、自分は誰かを幸せにすることは無理です』
『…良く解った…』

息を吐きだすように組長は言つと、ゆっくりと目を開けた

鋭い視線が俺を射抜く…

ぐっ……厳しい……

だが、これで勝ちが決まったあ！

『この娘が惚れた理由が分かるな』

ええええええええええ！？

なして！？

なして、こげな話に！？

『でしょー 珍しいでしょー？だからね、たっくんは沙生の傍に居て欲しいの〜』

満面の笑みで俺の腕に抱きつく沙生

……意味がワカラナイ…

『沙生、自分の勝手に押しつけてはいかんぞ。彼の意志も聞かなければならない。』

ナイス、組長！

意志は一つ！

結婚は嫌！

しかし どうすれば…

そうだ…

『…自分はまだやりたいことがありますし、彼女を巻き込むわけにはいきません』

よし！ナイス、俺！

良い言い回しだ

『えゝ沙生はどんなことでも耐えられるよゝ?』

ふっ! かかった!

甘いんだよ!

その言葉待ってたぜえ!

『俺、作家になりたいから…売れることなんて滅多にないし、凄
い貧乏な生活だよ?』

つまり、貴様には無理ということだな!

『貧乏平気! 愛があるから!』

しもつたあ!

それがあつたか…不覚!

そうきますかい!?

『…そんなに嫌か?』

ドスの効いた低い声で俺に聞く組長。

こ、恐!

ピンチ…こいつは…

四面楚歌の完成!?

に、逃げ場なし…!?

ノオオオオオオオオ!

第6話 なんとなくの終焉…？

> 四面楚歌<

四方を敵に囲まれ逃げ場のないこと
敵の中で全く孤立すること

まさに今の俺がそれだ…

『…そんなに沙生と結婚は嫌か？』

自分の不快さを、組長は明確に伝えてくれる

…威圧感と眼力で…

『あ、いや…』

…ダメだ！

気合いで負けるな、俺！

くそお…心が奮い立たないよおおお！

『…男だろ？はつきりしろ…』

尚も増していく組長のプレッシャー…

『……………』

はい、心が挫けましたね

もう無理！

どうにもできないよ！

く…小細工はもはや無理か…

ならば…

後は碎けるのみ！

カミカゼ！

『……………はい、今、お嬢さんと結婚は嫌です』
バンザイ…言つてしまいました…
あは…あははは…

『…そこまで言うとは……………良い度胸だな…』
！？

オーイエー！こいつは殺気じゃないか？

死ぬ…俺死ぬ…

殺されるな、これ…

思えばろくな人生じゃなかった…

俺の代名詞は不幸だったし…

有名な占い師には、

>あなたの後ろには、黒いモノが渦巻いている。だから、占いたくない…とか言われるし…

はっ！

今までの人生が目の前を流れていく…

これが走馬灯というやつか…

……………

……………

ぬおおおおおおお！

良いこと、一つもねえ！

このまま終わるのは、イヤだあああああ！

『はい…今この場で殺されても構いません。覚悟がありますから』

うそぉ！

俺、何言ってるアルか！？

自分で自分がワカラナイ！

誰か！俺を黙らせてえ！

長い……長い沈黙……

数分が数時間にも感じられる苦痛の時……

もう勘弁して下さいえ！

『……………ふ……………』

不意に破られた静寂

『ふぁはっはっはっ！』

え？

……………何……………？

何が起こったあ！

誰かワタシに解るように説明しろ！

大佐！

ワタシの思考レベル超たことが起こっております！

き、救援要請だ！

誰でも構わん！

今は外に出る口実が必要なんだ！

通信兵！

急いでジーンズのポケットを探り、見つからないように携帯を取り出す。

よし！

ここまでは成功だ！

後は…メールで誰かに電話してもらえば…ミッションコンプリートだ！

恐る恐る机の下で携帯を開くが、そこで驚愕する…

>ピー。充電してください<

うがああああああ！

なんてことだあ！

通信兵があ！

焦る俺、血走る瞳

そんな俺の状況を知らない組長は続けた。

『ほう…良い目をするな！今の若いヤツでそんなことを言えるのは、なかなかいないぞ？ますます気に入った！』

ノオオオオオオオオオ！

何言ってるんのオッサン！

気に入らないでえええ！

良い目、した記憶ないですから！

血走っているだけですから！

勘違いですよ、組長！

『まあ、よくわかった』
ん？

なにが！なにがですか！？
もうこれ以上の災厄は嫌あゝ！

『…この娘には良く言い聞かせよう』

.....
おおおお！？

なんだ、この展開は！？
今この場に神が舞い降りた…
神でも仏でも、悪魔でも良い…
感謝するよ！

『沙生、結婚の話は白紙だ』

YES！OH YES！
やったよ！やりましたよ！
奇跡は起こるよ！

『えー！いやだよー』

駄々をこねなるなあー！
話がややこしくなるから！
黙ってる！

『我儘を言つな。彼を困らせるんじゃない』
今は組長が心強い！
頑張れ、オッサン！

あんたの娘を丸め込め！

『……………わかった』

WINNER！

I・m WIN！

長い…長く厳しい戦いだっただが、俺は勝利したのだ！

エエイドオリイアーン！

ロッキーよろしく叫びたい気分だ！

『まあ…なんだ…彼とは改めて友達から始めなさい』……………え？
なにかおかしい言葉が…

…展開が嫌な方向に向かった気がする…

『うん！』

あれ…何その満面の笑みは！

これから頑張ります的な、力の宿った目をしてませんか！？

まあ…とりあえず終わったんだよな…

後はどうにでもできるさ

そっ…どうとでもできるのさ…

エピソードはプロローグ

全てのことに>一応くのケリをつけた…と思う…

俺は組長たちに帰宅の挨拶を済ませると、素早く店から飛び出した
だって…もう一秒でも早くその場から去りたかったんですもの！

そして、車で送ると聞かない沙生を

>自分の足で歩きたいからく
とかいう意味の解らない理由で言い含め、俺は急ぎ足で駅に向かった。

…己で言うてなんだが…

よくあんな理由で納得したな…

自分でも意味わからないし

ま、良いか

駅の改札を抜けたというのに、隣には何故か沙生がまだいた

なんなのよ、あなたは！？

色んな意味で恐いんですけど！

そんな状況を見捨てて電車に乗り込む間際、嫌な…聞きたくない言葉
葉を聞いた

『今度、不動産屋さん案内してくれる？』

いきなり何？

凄く嫌な感じなんですが…

『…は？なんで？』学習能力ないな、俺…

聞くのは恐いけど、尋ねずにはいられない

これは人間の性なんだろうな…

『部屋を探したいからに決まってるじゃん』

『いや、だから何故？俺、都内のしか案内できないし』

あなたは秋田の人でしょ？

関係ないんでない、俺…？

『だ・か・らあゝ東京に住むからに決まってるじゃん』

………

『………な』なんですとおお！？

聞かなきゃ…聞かなきゃ良かったああゝ！

『これからもよろしくね』

ぬがああああああ！

ああ、やはりこの世に神なんていないんだ…

どうやら…俺の災難はまだまだ続きそうです…

エピソードはプロローグ（後書き）

拙い文書ですが、楽しんでいただけたら幸いです。これからも定期的に投稿していく予定です。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5788b/>

BADな誕生日

2010年10月28日03時15分発行